

栗 国 島 の 陶 磁 器

宮 城 篤 正

いまにも泣きだしそうな雨雲が低くたちこめた粟国空港に降り立ったのは昭和55年3月26日の朝であった。筆者にとってはじめて訪れる島であるが、今回の出張は島に伝わる陶磁器調査が主目的であった。

去る3月19日、中国旅行から帰って一週間後のことと、十分なる調査の計画等もないままにあわただしく粟国島へ向った。しかし、幸わいなことに同機に粟国村教育長の安里寛吉先生が乗っておられた。もっとも粟国空港に降りてから小生が中学校に勤務していた頃の同僚であった宇垣用康先生（粟国中学校教頭）に偶然にお会いして、その場で安里先生を紹介して貰つて知ったのであった。

空港から安里先生のご子息の運転する自家用車に便乗させて貰つて、そのまま教育委員会へ直行した。

安里先生のおはからいで同事務所で教育委員長の上原英昌氏、文化財保護調査委員長の仲里秀雄氏にお会いして、挨拶と来島の目的を告げた。今回の調査には特に御三名の方々の絶大なるご協力を得たおかげで、調査は予想以上にはかかり、とてもありがたかった。

粟国島は空屋敷が多い。その空屋敷にころがっている壺屋焼のカーミ、ポツンと取り残されたトゥージにありし日の島の生活の面影がしげれる。トゥージの形は実に美しい。かつてはどの家庭にもあって、水のない島の生活にはなくてはならないものであった。このトゥージには大、中、小いろいろあって、またその数の多い少ないはそのまま貧富の差を如実に物語るものであった。人のいない空屋敷にポツンと取り残された如くに放置されている情景はなんとなく物悲しさを覚える。

(*みやぎ とくまさ 学芸員)

どこの家でも、どの空屋敷にも必ずといっていいほどころがっているのが壺屋焼の荒焼のカーミ類である。かつては味噌甕、穀物入れに大事に使用されてきたカーミであったが、もう今日では御用済みになって屋外にころがされている。島では年々過疎化現象が進む一方、生活様式にも変化が起つて、生活する上で絶対に欠かせない容器であったカーミやトゥージなどが、道を歩いているとやたら目につくのである。

戦前まで粟国島では豚の飼育と養蚕が盛んであったという。あの当時、船で那覇へ豚を売りに行っての帰りに生活に必要なこれらのカーミ類を買って帰ったのであろう。島にはまだ大きな木が少ないので建築用の材木とか屋根瓦等も買って帰ったという。現在、島では茅葺きの民家も非常に少なくなってきた。同時に瓦葺きの民家も同様で年々その数は減少の一途をたどっている。ということは反面、ブロック建築が増えているということになるが、外形上の変化と同時に島の人々の心にもなんらかの変化が起っているに違いないと思われた。



クチャグワーの味噌甕、穀物甕など
(昭和55年3月27日撮影)

粟国島ではカーミを貰ったり、あげたりすることを極端に嫌う風潮がある。カーミなどとくにやちむんには障りや祟があると考えられている。だから、めったに島人の手によって島外へ持ち出されることはなかった。しかし、今から7～8年前の民芸ブームのときに本土や沖縄本島あたりから古美術商の人々が出入りして、聞くところによるとあの当時多少持ち出されたという話であった。果してどのようなものが島外に持ち出されたのか、その数はどれ位であったのか、いまとなっては具体的に聞きとり調査をすることは困難な仕事である。

以前、大学生等による民俗調査が行なわれた際にも、多少は持ち出されたらしいとの話を今回の調査でも2、3カ所の家で聞かされた。実際にはどの程度であったのか、またどこまで真実を語っているかはよくわからなかった。というのは前述した如く、大学生以外の古陶磁をあさる目的で島に来た一般の人々もいたことであるし、それ等がすべて大学生になすりつけられている面があるようにも思われたからである。

島では要するにカーミをはじめ、物に対しては他の地域と比べて大きな差異があるように感じられた。しかし、外見上はそんなに大事に扱っている風にはとても見えない。たとえば、仮りに無造作に空屋敷にころがされているカーミでも、まず貰い受けることは困難であろう。要するに祖先のものを譲ったり、他所へ移動することを好まない。ましてや島外に持ち出したりすることに対しては、すごくこれを嫌うのである。それは島外から来た人に対してのみではなく、程度の差こそあれ、家族や親戚に対してもいえる話であるという。



茅葺きの民家（昭和55年3月26日撮影）

粟国島の陶磁器を総体的にみた場合、やはり圧倒的に多かったのは、壺屋で作られた荒焼のカーミ類であった。しかし、古い形態のものは殆んど見られず、多くは明治以降のもので占められていた。一方、粟国島の旧家には中国の色絵碗、染付碗などがセットで伝わっている例が多くあった。それらは中国へ行っての帰りに土産として買い求めた品であると伝えられていた。なかでも、色絵の図柄には沖縄本島ではあまり見かけないものがあった。染付碗にはトウジュンカンと称していた。これらの碗類と共に中国製の南蛮甕も伝来していたらしいが、戦争で米軍が島に上陸したことあって、それ等の陶磁器類はかなり数少なくなったという話を調査中に聞いた。

次に今回調査した中で、特色のある陶磁器について少しふれてみたいと思う。

①粟国村文化財保護調査委員長の仲里秀雄氏宅には陶磁器がざっと20余点あった。その大半は壺屋の荒焼甕で占められていたが、なかには薩摩焼の壺が3点、奄美大島の津名久焼の壺が1点、支那南蛮甕が2点含まれていた。今回、その中から6点だけ図版で紹介するが、なかでも黒釉香炉はもっとも古いものであった。胎土は赤土で漆黒のマンガン釉がたっぷり掛けられていた。おそらく湧田焼か壺屋初期の作品かと思われたが、一応ここでは湧田焼とみておきたい。

②宮里恭人氏宅には染付茶入れ、紫泥酒注、呉須絵瓶子(1対)が伝世していた。宮里家は屋号をウザシチウフヤといい、昔、祖先に中国で役職についた人がいた話が伝えられている。壺屋焼の徳利型の瓶子には岩に蘭が描かれている。ただ、呉須の発色が良好ではなく、むしろ飴釉に近くなっている。最近まで仏壇の花生として使用していたが、瓶子とわかつてからは花生けにはしてないという。

また、染付茶入れの製作地について、資料不足で中国か日本かで判断しかねるが、模様等から考えて一応、中国製とみておきたい。

③玉寄家（玉寄文雄氏）は屋号を東サクといい、もと粟国ノロが出た家柄といわれている。ここには、抱瓶、嘉瓶、渡名喜瓶、荒焼一升徳利な

どがあった。抱瓶はそんなに古いものではないが、これまで筆者が県内を調査した経験からも抱瓶の伝世例は極めて少なく、なかなか出会えないものである。聞くところによると、今から4年前に83歳の高令で他界された文雄氏の父が、物心ついたときからすでにあったということなので、おそらく明治初期頃の作品かと思われる。柿釉渡名喜瓶には飛鉈文があって、壺屋初期あたりの作品と思われる。

③山内堅志氏所有の中国製の南蛮甕(三耳)の肩の部分には重ね跡のものと思われるキズがあり、肩と胴部の境を内側から手でなでると継ぎ目あとがはっきりとわかる。この甕は昔、粟国島の近くで難破した船に積載されていた貨物のひとつで、中には一杯お茶がはいっていたという。この種の甕はお茶の容器として作られていたとみて、他にも沖縄に請来された例がある。なお、山内家には箔絵山水文高御縫があり、おそらく島に伝わる漆器のなかでは優品と目されるものである。

今回の調査で粟国島に伝わるすべての陶磁器をみたわけでは勿論ない。なかには都合によって調査出来なかった旧家もあったし、また空家になっている所は最初から調査対象からはずしておいた。島の民家には肩が張り、底部がしづまつた本格的な中国の飴釉南蛮甕があったことを他の学芸員の調査でわかっているが、筆者は

実見していないので今回の報告からは割愛した。ということで、島に伝わる陶磁器が他にも似たケースで伝わっていることが十分予測される。しかし、今回の調査は不十分ながら一応この辺でこの報告を終りたい。

〔附記〕現在、粟国村教育委員会では文化財保護条例を制定し、5人の文化財保護調査委員を任命している。島では、教育委員、文化財保護調査委員、老人クラブの三者合同によって、島に残る民俗資料等を手分けして目下調査中であった。そして、その成果をもとに近々「民具展示会」を開催する予定であるという。丁度、筆者が島を訪れたときには民具展示会に向けて、教育委員会に多少資料が集まりつつあった。安里教育長をはじめとして、上原教育委員長、仲里文化財保護調査委員長など熱心な方々なので、大いに今後の活動が期待される。

粟国島ではアンダガーミ(油壺)をタラフという。小型のものをタラフグワーといつて区別している。

図版 1



1 緑釉流抱瓶



2 黒釉香炉



3 吳須絵瓶子



4 黒釉嘉瓶



5 柿釉渡名喜瓶



6 緑釉花生

図版 2



7 ヌチャーシードンブリ



8 線彫芭蕉 ヤシ ソテツ文中皿



9 吳須絵文中皿



10 ヌチャーシードンブリ



11 タラフ(左)、彫絵壺(右)



12 飛鉢四耳壺

図版 3



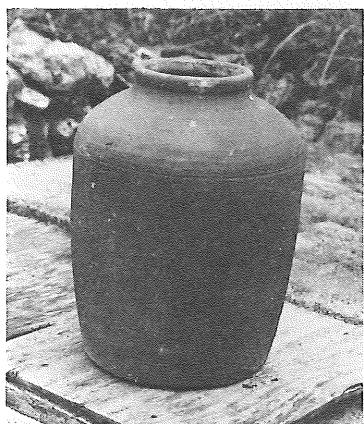
13 タラフ(左)、タラフグワー(右)



14 荒焼壺



15 デーヒヤー



16 荒焼壺



17 酒甕

図版 4



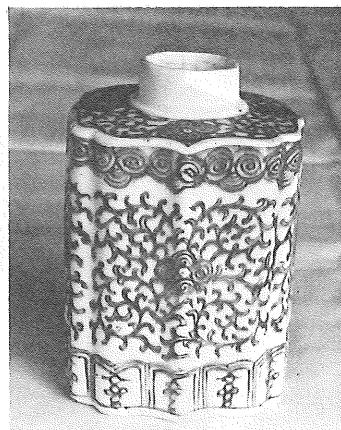
18 色絵碗



19 色絵碗



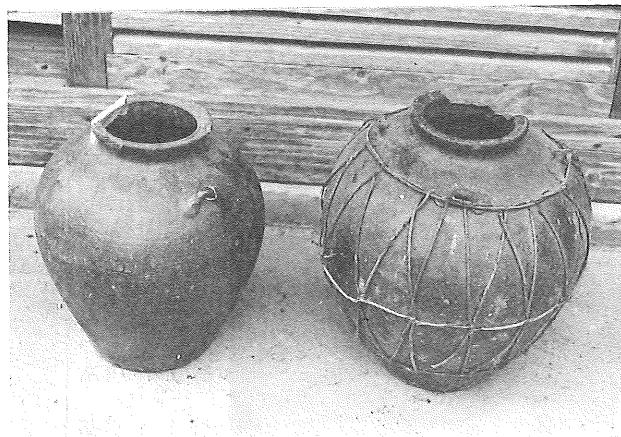
20 染付碗(10個)



21 染付茶入れ



22 薩摩焼甕

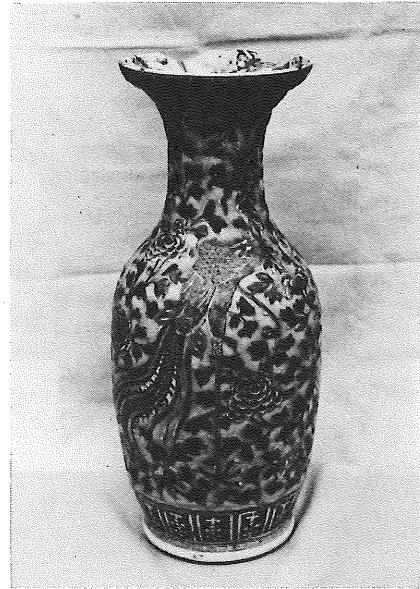


23 薩摩焼壺(左)、(右)

図版 5



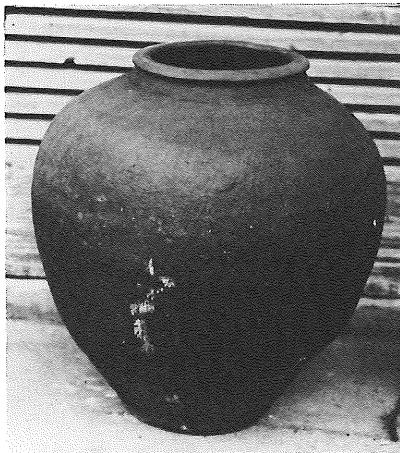
24 紫泥酒注



25 牡丹鳳凰浮き模様花瓶



26 支那南蛮壺



27 支那南蛮壺



28 支那南蛮壺

図版目録

番号	名 称	窯名	寸法 (単位cm)	時 代	所 有 者 (敬称略)	住 所
1	緑釉流抱瓶	壺屋	高12.0 径20.0	19世紀	玉寄文雄	字西205
2	黒釉香炉	湧田(?)	高9.3 径16.4	17世紀	仲里秀雄	字西9
3	吳須絵瓶子(1対)	壺屋	高20.0 口径3.2	19世紀	宮里恭人	字西208
4	黒釉嘉瓶	〃	高27.0 口径5.5	〃	玉寄文雄	字西205
5	柿釉渡名喜瓶	〃(?)	高20.5 口径3.5	17世紀	〃	〃
6	緑釉花生(1対)	〃	高18.2 口径10.3	19世紀	仲里秀雄	字西9
7	ヌチャーシードンブリ	〃	高6.0 径17.5	〃	伊差龜吉	字浜123
8	線彫芭蕉 ヤシ ソテツ文中皿	〃	高6.5 径23.6	20世紀	安里豊藏	字東104
9	吳須絵中皿	〃	高5.6 径21.3	19世紀	又吉盛徳	字東584
10	ヌチャーシードンブリ	〃	高6.7 径17.7	〃	安里好江	字浜241
11	タラフ(左)、彫絵壺(右)	〃	高26.0 高21.0 口径12.9 口径10.2	20世紀	安里豊藏	字東104
12	飛鉋四耳壺	〃	高39.5 口径15.3	〃	仲里秀雄	字西9
13	タラフ(左)、タラフグワ(右)	〃	高31.3 高22.3 口径15.1 口径10.5	〃	〃	〃
14	荒 焼 壺	〃	高32.2 口径5.1	〃	新城雄元	字浜51
15	デービヤー	〃	高29.0 口径48.0	〃	安里豊藏	字東104
16	荒 焼 壺	〃	高31.0 口径11.5	〃	渡口龜吉	字西380
17	酒 蔷	〃	高90.5 口径25.8	19世紀	〃	〃
18	色 絵 碗	中国	高7.5 口径16.1	清	安里好江	字浜241
19	〃	〃	高7.2 口径15.3	〃	新城とよ	字東382
20	染付碗(10個)	〃	高6.8 口径14.8	〃	安里豊藏	字東104
21	染付茶入れ	〃(?)	高12.4 口径3.5	〃	安里恭人	字西208
22	薩摩焼甕	鹿児島	高42.3 口径19.8	19世紀	仲里秀雄	字西9
23	薩摩焼壺(左), (右)	〃	高19.2 高33.0 口径14.0 口径13.0	〃	〃	〃
24	紫泥酒注	中国	高10.6 幅径17.0	清	宮里恭人	字西208
25	牡丹鳳凰浮き模様花瓶	〃	高62.4 口径22.3	〃	安里寛吉	字東15
26	支那南蛮甕	〃	高40.7 口径10.8	〃	岸本勇吉	字西557
27	〃	〃	高45.2 口径21.0	〃	仲里秀雄	字西9
28	〃	〃	高52.3 口径13.5	〃(?)	山内堅志	字浜145